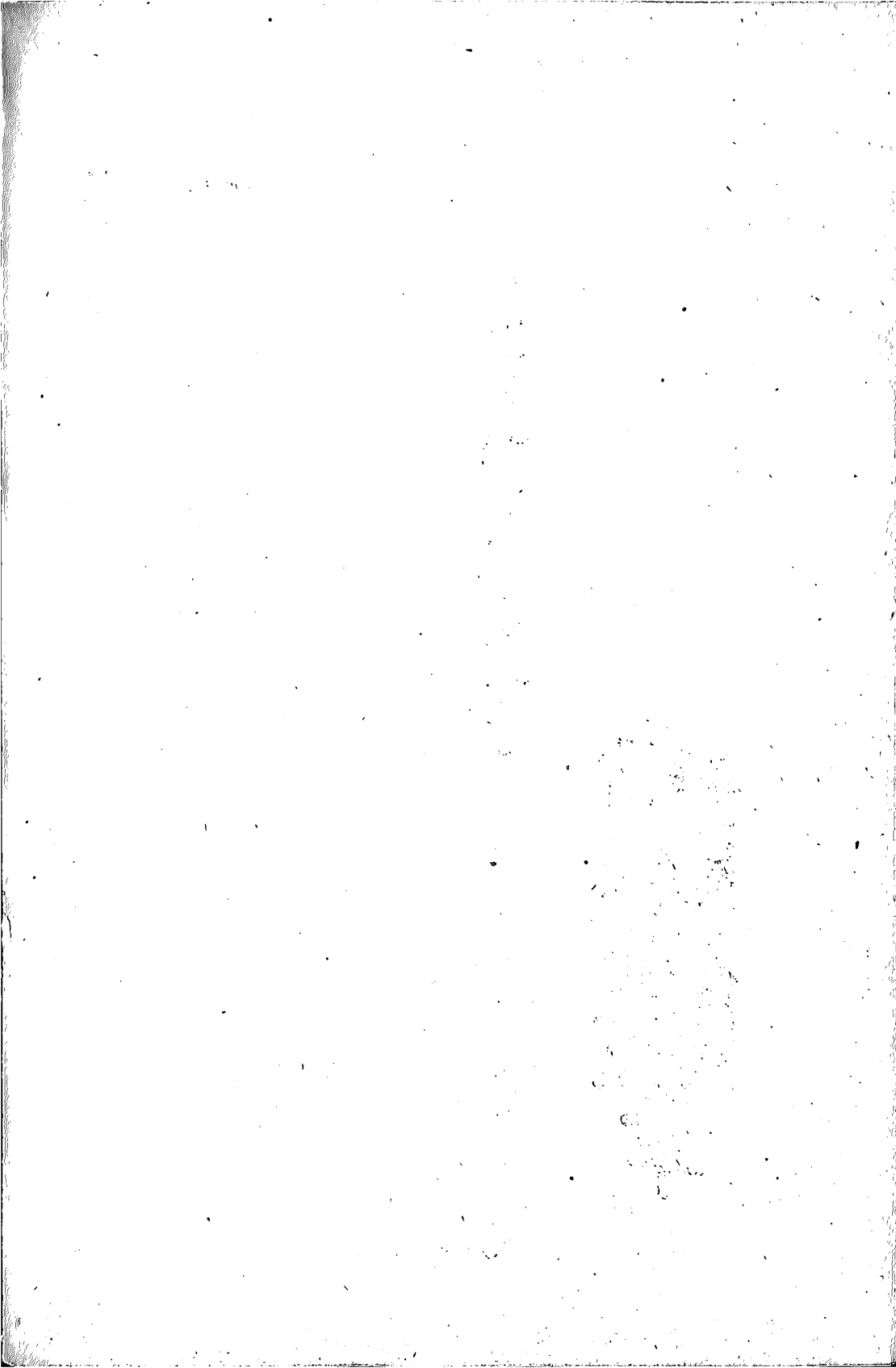


近松會雜誌第五號附錄

香川蓬洲新作

成相寺觀世音靈驗記

竹本春子大夫章
豐澤新左衛門



西國二十八番札所

成相寺觀世音靈驗記傘松茶店の段

ふだらくや。岸打波は三熊野の。第一番の札所から二番三番順々に。二十八番の御靈場丹後の國成相の。觀音菩薩の靈驗は。いやちことこそ聞ける。十八町の山阪を登り下りの足休め、兩舎りにも傘松の。茶店につどひ來る人の。絶間は更に内儀の愛嬌。汲んで出す茶も溢からぬ。茶碗でんでに取上げて。いやこれ皆の衆。この茶店の繁昌も。觀音様のお庇蔭なれど。一つはかゝ衆の愛想のよい爲め。さうぢやども。忠作殿の云はしやる通り。女に愛嬌がなうては。砂糖に甘味のないやうなものぢや。ほんに愛嬌と云へば。お源婆の處のお袖殿。連合の難病を癒したさに。毎日々々觀音様へ願詣で。鬼婆の子に彼のやうな優しい娘があらうとは。お釋迎様でも御存じあるまい。サイヤイお袖殿の爺親は。元は宮津で歴々の商人。お乳母日傘で育て上げたお袖殿。琴三味線から香茶の湯。女の道の一ト通り。教へこんだ其上に。まだ行儀作法を見習はせやうと。出石の御家中へ侍女奉公。其後爺親は急病でがつくり往生跡に残つたアノお源殿は。夫の存生中から大酒呑み。夫のみか女だてら。博奕が好きで僅かの年月に。飲むと打つとで財産を減し。今では町外れで詫しい暮し。其貧乏も厭ひなくお袖殿は。夫の看病の片手

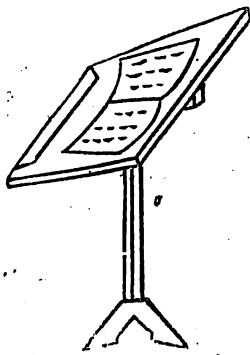
に。娘子達へ琴の指南。藝が身を助けて居る今の有様。何と不便ではござらぬかと。ほろりとこぼす一
ト雫。涙の雨に傘松の。茶屋の女房も鼻つまらせ。まだお年も若いのに。一日かゝるぬ御参詣。よくよ
くの心願でござりませう。サ、其心願と云ふのは。去年お屋敷から連れて戻つた。戀男の作次郎殿の。
壁を本復させたいと。女の一念貞節の志し。お袖殿の心では。當人の作次郎殿にも。参詣がさせたから
うが。壁では及ばぬ事ちや。そこを思ふて此忠作は。壁車をこしらへさせ。内にちやんと置いてござる
今にもお袖殿が下向をして來られたら。其事を云ふて喜ばせ。私が内まで連れ立つて歸り。アノ車を挽
かせて歸らせようと思ふのちや。と聞いてお松は感じ入り。夫れは善根奇特な事。と云ふを打消し。何
の。奇特も善根も其質は。知つての通り私の娘は。お袖殿を師と頼み。毎日々々琴の稽古こゝりん
しやんと忘れても。深切に教へて下さるので。何かな禮がしたいと思ひ。フト思ひ附いた壁車。作次郎
殿を乗せてアノお袖殿が。此山阪を挽いて登らうものなら。夫れこそ昔の壁勝五郎箱根山の初花を其儘
であらう。佛の功力は廣大無遍。お袖殿の信も屈さ。作次郎殿も今に全快さつしやるであらうぞや。ほ
んに私等も此様にお参りはして居るが。觀音様の御縁起を委しう知りませぬ。コレ忠作殿。こなたは評
判の牛のお尻。何でも知らぬ事はないとの噂。成相寺の御縁起を説いて聞かせて下さらぬか。オ、聞か
さうとも。勸むる功德は何とやら。さらばこゝで辻談義。縁起を説いて聞かせませう。そんなら聽
聞々々。みな。床几に行義よく。腰打掛けて畏まる。忠作は勿體ぶり。エヘン。抑も丹後の國與

謝の郡。成相山正觀世音菩薩の。由來をこゝに尋ねれば。頃は人王四十二代。文武天皇の御宇。慶雲元年の秋の夜に。當寺の開山眞應上人。佛の靈夢に丹州の山路を深く分け入りて。靈地を索ね此處彼處。さまよひたまふ時しもあれ。一人の老僧忽然と。出現まし。一體の正觀世音の尊像を。授けたまひし其所が。即ち今の御堂の地。其後養老二年の冬。大雪しきりに降積り。往來も途絶わ上人の食する粃米も盡き果て、飢渴の餘り御命も。既に危ふく見わたる折しも。一疋の鹿草庵の。扉の前に來たりしと。思ふ間に早や斃れ死す。上人不思議と立寄りて。つくく鹿を見たまへば。之を正しく三種の淨肉、我が飢わを救はん爲めかと、其鹿の股をさき。食したまへば精神すゞしく。氣力も疾みに増し來たれば。コハ辱けなし之れとても佛の加護と佛間に至り。觀音菩薩の尊像を。見奉つればアラ尊とや。木像の御股より。鮮血淋漓と流れ居る。扱は菩薩が鹿と化し。我が飢渴を救ひたまひしか有難や辱けなや。と三拜九拜懺悔の念誦を修したまへば。不思議なるかな靈像の。傷口癒わて元々に。なれ合しより御寺の。其名を今に成相と。稱ふる事となりける。何と解つたかく。有難い謂れを聞き。猶更信心する氣になつた。其有難い觀音像を信心する娘に引かへ。強慾非道なお源婆。現在産みの娘に隔て心。譬へにも云ふ通り。嫁と名が附きや我子も憎いのであらう。サイナア。婿の作次郎殿を抛出して。金のある跡釜を据る魂膽は博奕場で。うま合の丑松めを味方に引入れ。碌な事は仕出かすまい。イヤモ女の癖に博奕を打つて。いつも財布は唐草模様。併し財布を空にするのは此地の名物。ソレ聞かんせ。二度と行くま

い丹後の宮津。縞の財布が空になるアハ、ハ、ハ。オホ、ハ、ハ。ア、コレ長太。こなたは其處で何をして
 居るのぢや。私は今此方衆の話しを聞いて。恐れかんしんの股くやりではなうて。股の間へ斯う首を入
 れて。日本三景の其一つ。天の橋立の景色を見て居るのぢや。アハ、ハ、ハ、爾うぢやあるまい。大方お山
 へ參詣をする。女順禮の股の間を。然うして覗いて居るのであらう。エ、馬鹿々々しい何を云ふのぢ
 や。アハ、ハ、ハ。オホ、ハ、ハ。つまらぬ話しに思はず長尻をした。歸りは文珠の名物。智恵の餅で腹ふ
 くらさうか。イヤ、ハ、ハ、こちは四軒茶屋の名物。でんがくを肴に熱燗でキユーツと一杯。ア、此咽がゲウ
 くと催促するわい。忠作殿。こなたは此處でお袖殿の。下向を待つて連立つて歸らつしやれ。跡に残
 つて私等の茶代。一蓮たくさん頼みます。こちらはお先さへ歸りますと。勝手な事をしやべりつ、我家
 々々へ立歸る。テモあつかましい人達ぢや。と眩きながらすつば。煙草くゆらし居る處へ。順禮な
 らねど笈摺に。人目ごまかす李平が。管笠片手に歩み來る。跡から此處へ。ちよこ、走り。重いお尻
 にまじかり股。職女のお蛸がうろく眼。ばつたり見合す顔と顔。ヤア戀人か何故に。こ、等で肩に笈
 摺は。もしや詠歌のひとつでも。唱へてやろどのお心かど。口には云へど心には。おほ、をかしき風情
 なり。成程爾う思やるももつともく。豫てそさまも知る通り。此李平に首つたけ。惚れて居る。アノ
 おみつちや。同じ職女のそさまとの。中を知りつ、無理な戀。何卒縁が斷りたいと。切戸の文珠へ願を
 かけ。手を切つて下されと。今も今とて參詣をして居る處へ。おみつちやが跡追ふて來たゆゑに。そつ

と逃げて順禮と化けたのぢや。嘘ぢや〜李平さん。口では立派に云はしやんしても。おまへはアノお
みつちやめに。まだ未練があらうがな。何の未練があらうぞ。飽いたればこそ此處まで逃げて來たのぢ
や。そんなら眞實私と女夫に。サア夫れも互ひに今日では。丹後縮緬の織場の職人。時節を待つた其上
で。エ、時節を待てとはどうよくな。無情の君やと恨み言。思ひ亂る、霞實かげ。それとおみつちやが
走り出で。中を隔て、立柳。立退く袂引止め。エ、聞いませぬ李平さんそりや氣の多い悪性な。そもや
二人の馴初めは。初めて宮津のお祭りに。葉越の月の面影はお武家さんやら。職人さんやら。知れぬな
りふりでつぷりと。水ぶどりした大男。他のおへこは禁制と。まめて固めし肌と肌。主ある人を大膽な
ことわりなしに惚れるとは。どんな處にもありやせまい。イ、ヤをもじとて親方の。許せし中でもない
からは。戀は仕勝よ我男。イ、ヤ私がイヤわしがと。彼方へ引けば此方へ引く。中に李平地團だふみ。
マア〜〜待つてくれ。さう兩方から引張つては。此李平皺くらやになるがな。マア待て〜。色男
には何がなる。一人の男に二人の女房。此上は文珠の智慧をまばり出し。鬮引にして何方なりとも。引
當た方が本妻ぢや。エ、何を鬮繩にしようぞ。こうつと。オ、あるぞ〜。おみつちやもお蛸も。其ひ
しごきを解いて貸しや。オットよし〜。此二筋の中どちらかの端を。ア、コレ〜見るなよ〜。結
んである方を引き當た方が勝ちや。サア〜目をふさいで此先きを確かりと持ちや。オット目を明く事
はならぬ〜。サア引張れとひしごきを。結び合して二人に引かせ。其間に李平をつと抜け。ぬき足を

し足逃げ出す。縁の小田巻それならで。當りておみつちやが怪氣もせず。男の跡を附けるとも。知らずお蛸もひしごきを。たぐり／＼て追ふて行く。いづこの里も戀なれや。道引違へていきせきと。阪道下るお袖の姿。忠作目早に。オ、お袖殿か。待つて居ました。オ、これは忠作様。今から御參詣でござりまするか。イ、ヤ爾うではない。いつも娘がお世話になる。お禮と云ふもをこがましいが。こなたが夫の作次郎殿を。乗せる爲めの登車。私が處に拵へてござる程に。婆さまの機嫌のよい時に。作次郎殿を其車に乗せて。せめてお山の麓までなりとも。夫婦諸共に參詣をさつしやれ。と情けも籠る贈り物。お袖は嬉し涙含みエ、有難う存じます。去年の秋から夫は覺。悲しい時の神頼み。佛いちりに成相の。観音様へ願籠めも。どうぞ本復させたいばかり。つれない親の氣を兼ねて。日毎々々の徒歩詣で、何の験しもあらざるは。まだ信心の届かぬかと。嘆きかこつぞ道理なる。オ、正理ぢや／＼。併し信心すれば徳はあるもの。まだ問ひたい事もあるが。下向の道すがら話しませう。コレか衆。茶代はこゝに懐中から。取出したる四文錢。御門の方をふり返り伏拜みつゝ兩人は。麓をさして歩み行く。



悪婆お源内より文珠門前成相観音

御利益の段

打寄せる。渚は與謝の入海や。丹後宮津の町外れ。軒端傾ぶくあばら家に。ふさはしからぬ爪は。優しい娘が母親と。夫を買の種ぞとは哀にも。また殊勝なれ。近所づからの教へ子を。いなせてお袖は琴片附け。一間の障子をそつと明け。作次郎さん。お前毎日喧しからう。モウ娘子達も歸り。かゝさんもまだ戻りはなざるまい。其留守の間が夫婦の楽しみ。マアこゝへと後から。抱きかゝれば作次郎。いざりながらに一間を出で。コレお袖。去年の秋から此業病。腰膝立たぬ私への貞節。榮耀の爲めに覺けた琴も。今では生活の種になる。そなたの心根。思ひやる程不便やと涙含めば。ア、コレ。私が琴を教へるのも。お前を買の爲め計りではない。つれなうても親への孝行。其私の氣も知らず。道に外れたかゝさんの行狀。モ私しやお前に氣の毒と。云ふを打消し。そりや何を云やるぞいのう。不思議の縁で夫婦となり。今では此家へ入婿同然。そなたの親は私にも親。其姑がそなたや此身に。辛う當るも無理はない。如何に娘の婿ちやと云ふて。此壁には愛想もつきやう。其不具者をば夫と思ひ。抱きかゝへてのこなたの看病。死んでも忘れぬ嬉しいぞやと。手を合せば。ア、コレ何のお禮に及びませう。夫と云ふも勿體ない。お前はお主の若旦那。今更いふではなけれども。一昨年春櫻時。初のお目見は奥様の

お望みなされた琴の調べ。モ恥かしいやら嬉しいやら。躊躇傍からお前の口添へ。可愛いとを弾いて見よど。ツイ仰しやつた可愛いとが。身に染々と初恋の。何に弾いたやら謠ふたやら。絲より亂れし私心。筆に云はせて書送る。墨も濃字のいろは假名。かなへてやるとのお返事を。肌身に添へて片時も。忘れぬ此身の願ひがかなひ。二人斯うして居るならば。貧しい暮しも何のその。たとへ深山の奥の奥。月洩る伏家も厭ひはせぬと。身を摺寄せて目に涙。濡るも戀の憤ひぞや。牛は牛連れ丑松と。運立歸る主のお源。我家の軒に佇みて。小聲で何やら呟けば。打點首て丑松は。裏の方へと忍び行く。跡にお源は戸口に身を寄せ。内の様子を窺ひ居る。とは知らずして作次郎。武家の掟を破りし醜行。そなたは追放私は勘當。さて頼寄るべき所もなく。大小捨て町人ど。なりふりかへて遙々と。此宮津へ来てそなたの家に身を寄せたのは。去年の五月。其當座はお源殿にも。彼程邪慳ではなかつたが。月日の經つに從ふて。苛い無情いなされ方。今日はお出やうか。明日はお出やうと思へども。縁の絆にからまれて。一日々々と延びる中。フトした風邪の心地から。腰の痛みが彌増り。遂には壁となり果しより。愈々つたる老母の慳貪。ア、夫れも其筈壹錢の。働ささへも出来ぬ此身。娑婆塞げとは私がこど。寧ろ死んだらそなたの苦勞も。此身の苦患も助からうと。立たぬ膝ぶし握り詰め嘆く夫の心根を。思ひやる釋悲しさの。胸に突かけせぐり来る。涙呑込み呑込んで。ア、コレ。其難病も。成相の觀音様へ立願籠めて本腹をお願ひ申してある程に。ツイいんまの間に癒りませうと。口には云へど。百日の。満願の日に此有様。神

や佛ほとけの力ちからにも。及およばぬ事ことかとかこち泣な。夫婦手ふうふてに手てを取とり交かし。暫しばし言葉ことばもなかりしが。お袖そでは最前さいぜん忠作ちゆうさくの情なさけけの車くるまを思おもひ出だし。先刻さつきにも話はなした通り。忠作ちゆうさくさんから貰もらふた車くるま。彼かれれにお前まへを乗のせまして。せめてお山やまの麓ふもとまで挽ひいて往いて。ともなくに参詣さんげいをする私わたしが心こころ。モウきなくと思おもはずと。俱ともに信しん心しんして下くださんせ。イヤモウ。唯たださへ秋あきの物悲ものかなしいのに。愚痴ぐちの涙なみだをこぼしてのけた。アハ、オホ、オホ、。氣き紛まぎらしにコレお袖そで。久ひさしう弾ひかぬ橋立はしだての曲きょく。今日けふは私わたしに聞きかせてたも。何なにを云いはしやんすやら。毎日まいにち々々弾ひく琴ことを。サイノ。娘子達ぢやうぢやうたちの稽古けいこなら。聞飽きあきもするであらうが。飽あかぬは秘曲ひまきの天あまの橋立はしだて。ありや百人ひゃくにん一首しゆで人も知る。小式部こしきぶの内侍ないじが和歌わか。面白おもしろい手てが附ついてある。そなたが屋敷やしきに居ゐる時に。弾ひいたのを聞きいたまよ。弾ひいて聞きかしやと。只管ひたすらに。望のぞみ掛かけられアイノと。夫おつとに心こころづくし琴こと。調しらべよとまぬ次山つぎやまの。流れも清きよき一ひとト奏かなで。歌うた大江山おほやまいくの、道みちは遠とほけれどまだふみも見ぬ天あまの橋立はしだて。音ねも澄すみ渡わたる一曲きょく。の終はると共に入口いりぐちがらり。ぬつと入いる來きる母親ははおやの。顔かほ見みてびつくり琴片ことかたづ付け。オ、か、さん戻もどりやしやんしたか。オお袋かぶちかお歸かへりなさりませ。と手持ても不沙汰ふさたの挨拶あいさつに。日ひが暮くれか、つてあるに灯あかりも點ともきす。面白おもしろさうにコレリンノ。ア、申まをし。面白おもしろさうではござんせぬ。今日けふ忠作ちゆうさくさんに逢あふた時とき。娘御ぢやうごのお花はなさんに。橋立はしだての歌うたを教おしえて呉くれと頼たのまれたれど。餘あまり久ひさしう弾ひかぬので。今いまちよつとおさらへをしして居ゐた處ところ。マアそんな事ことはどうでも宜よい。コレ娘ぢやうご。マア喜よろこんでたも。今日けふのまた連つんのよさ。出でる賽さいの目めが思おもふ壺つば。お底かげで財布さいふも此この通りぢや。其祝そのいはひに作次郎殿きやじらうだんへ酒さけを一口くちふるまひ度たい。こなた太義たぎながら

一走り。酒屋まで往て来てたも。といつになき母の機嫌は底氣味悪く。手をもぢく立兼ぬる。作次郎も心ならねど。日頃の氣質逆らうてはと目で知らせ。ア、コレ。お袋の仰しやる事。ちやつと酒屋へ往ておじやと。云ふ間にお源は財布の紐。とく／＼取出す一步銀。角の取れたる今日の仕誼。様子あらんと思へども。お袖は袖に酒徳利。隠して酒屋へ急ぎ行く。お源は行燈取出し。點す灯影も薄暗き庭に下り立入口のかけ金内より。確乎と掛け。コレ婿殿。嘘を吐いて娘を追出し。酒屋へ遣つた其留守の間にチトこなたへ頼みがある。が何と聞いて下されぬかと。猫撫聲。作次郎は不審顔。お袖の縁で長々の御厄介。其私にお頼みとは。外の事でもござらぬ。チト急に金の入用。こなたも今でこそ。落ぶれて居さつしやるが。以前は隣國出石の御家中。結城作左衛門様の御二男。武士のたしなみ懷中に。貯への金があらう。其の金を何卒此婆に貸して下されど。思ひも寄らぬ雜題に。ハツと思へど。アハ、ハ、ハ。御冗談仰しやりますな。尤も屋敷を立退く時には。少々金子を持居たれど。夫れもお前に。イヤサお前さまの仰しやる事。有さへすれば差上げませう。すりや金は無いと云ふのか。ハイ金より外の事なれば。外の事なら聞くちやまで。マア仰しやつて見て下さりませ。斯う云ふ事もあらうかと。外の思案もしてあるのちや。コレ作次郎殿。暇状を書いて下され。エ、ー。お袖と縁を斷つたと云ふ。三下り半を今此處で。何ちや／＼何を恠り。其面は何ちや。合せものは離れもの。きり／＼去り狀書いた上で。己れも此家を出て行きおれど。早やそろ／＼と地金の悪口。ア、申し。何がお氣に障りしか。飽も倦れもせぬ

中の。お袖に去り状が書かれませうか。また出て行けど仰しやつても。歩行もならぬ此身の不具。何んや。飽きも倦れもせぬ中ちや。オホ、。爾うであらう。娘どの中はさうであらうが。此親が飽き果た。倦いたこなたを抛出して。金の有る好い婿取つて。左團扇の樂隠居。素寒貧のこなたに飽いて。親の威光で縁切らすのちや。夫れが嫌なら其懷中に。くすねてある臍栗金。こゝへ出しや。私の懷中に金と云ふては。イ、ヤ。無いとは云はさぬ。日頃から大切らしう。肌身放さぬコレ此胸巻。ア、申し。これは金ではござりませぬ。お袖が私の病氣を治さう爲め。受けて來た觀音様の御守。何ちや。御守ちや。ドレ。檢めてと作次郎が。支へる手先きを拂ひ退け、引出したる木綿の胸巻。罰は其身に當るども。自紙包みの守札。手早に取出し見て恠り。ヤ、こりや矢張り守札。エ、忌々しいと。腹立つまゝに引裂き、投棄て。破れかぶれの其所へ。蟲が知らすか酒屋から。歸るお袖が急ぎ足。我家の門口戸に掛金。合點ゆかじと打叩けど。いらへなければ戸の隙間より。覗けば内には母親が。作次郎の襟髪潤んで。情け容赦もあらくれ聲。大川に水絶すと。元が元ゆるまだ懷中には。私に隠して二三十兩。持つて居ると思ひの外。鯉一文もないからは。愈々此家にはモウ置かれぬ。サア出て失せう出て行けど。拳を固めて滅多打。外にはお袖が身も世もあられず。コレかゝさん何の科で其様に。コレ此處明けて。と氣を焦る。作次郎も口惜しさに。手向ひせんにも女房の親。親と云ふ字に兩手を縛られ。じつと堪ゆる無念泣。お源は尙ほも圖に乗つて。オ、口惜しいか。是程にしても手出しをせぬとは。云はうやうない大腰抜けサ

ア出て行けど。また打擲。お袖も今は堪り兼ね。打叩き／＼碎りよ。割れよと我身をしづ。門の戸めり
 く打破り。其儘駆入り母親に。まがみ附いておろ／＼聲。エ、お前はなア／＼。夫と云へど私の爲め
 には。大事の／＼お主様。何科あつて此折檻。と云ひつ、傍に落散つたる。御札の破れを手に取り上げ。
 ヤア此御札を誰が破つた。オ、私が引裂いた。コレお袖。錢札の代りにもならぬものを。大切さうに持
 つて居るゆゑ。己りや金と思ひ込んで。今日まで甕を婿あつかひ。可愛がつて居たけれども。金の切目
 が縁の切目。此奴を抛出し。こなたには跡で好い婿を取つてやる。甕が居ては面倒ゆゑ。暇状書かして
 追出すのぢや。エ、そりやマア何を云はしやんす。コレ作次郎さん。必ず／＼り状書いて下さんすなへ。
 コレか／＼さん。去年若旦那のお供をして此宮津へ歸つたときに。お前は何と云はしやんした。オ、好い
 婿を取つたぞ。其マア怖い顔をにこ／＼として。喜びやしやんしたではないか。二年とたゝぬ其中に。
 お前は御恩を忘れてか。三世の縁を二世にかへ。堅い約束した中を。どうして縁が切られうぞ。其大切
 な夫の病氣。治さう爲めに成相の。観音様へ立願かけ。受けた御札を勿體ない。引裂きやしやんした其
 時に。能うマア其手がエ、マ折れなんだ。佛の御罰おそろしい。と思はぬお前は隣國の。大江の山に住
 みしと聞く。鬼か鬼神か恨めしやぞ。散亂したる観音の。御守札を拾ひ上げ。継ぎ合せ／＼。一心不亂
 佛に謝罪。作次郎も妻の貞節。思ひやる程我身の不幸。悔むに餘る目に涙。夫婦が涙はら／＼。落て流
 れて金引の。瀧水増る許りなり。さしも非道の母親も。我子の有様つく／＼見て。ア、誤つた／＼。悪

かつたく。娘許したも。婿殿も堪忍して下され。今後すつかり心を改め。酒も呑むまい博奕もやめる。まだ夫ればかりぢやない。お袖を見習ひ。観音様を信心する。ア、勿體ない。南無大慈大悲の観音様。婆が罪障消滅をなさしめたまへ。観音様ど。其内心は白髪頭。疊に摺付け詫び居たる。お袖は嬉しさ又涙。其お心にならしやんしたら。謝罪の爲めに此御守を。お前が持つて観音様へど。手渡しすれば押戴き。明日は早々参詣しませう。お前はかねく観音堂で。お通夜がしたいと云ふて居やつた。今宵は秋の最中の月。幸ひ貰ふた彼の車へ。婿殿を乗せて女夫連立。所詮お山へは登られまいが。心床しに切戸へ行き。文珠の御門を成相寺の。御本堂になぞらへて。心置きなうお通夜をしや。私も内の締りをして。跡から往つて共々に。御詠歌なりとも唱へませう。オ、嬉しやく。其御許しの出た上は。私が豫ての望み通り。夫と共にお通夜をして。一日なりとも此難病を。早う治して戴きたい。申し作次郎さん。お前は車へチャア早うと。甲斐々々しくも抱きかゝへ。お源も共に手傳ふて。漸う乗せし躰車いざやお袖が挽き出す。夫も車に法の道。月をよすがに磯傳ひ。切戸の方へ挽いて行く。様子見届ぬ奥の間より。ぬつくり出たる丑松が。モウ出やうか〜と思ふ中に。思ひも寄らぬ此方の改心。サイヤイ。そこが臨機應變ぢや、此家で婿めをばらして呉れど。お前に頼んで置いたれど。如何も此處では跡が面倒。發心したと見せかけて。安心させて女夫ながら。文珠の御門まで遣つたのは。コレ丑松。ちよつと耳を貸しや。ソレ斯う。斯うぢやと呟やけば。ウ、成程。時刻を計つて寤めを。コレ大きな聲をす

るないやい。甞ど侮り不覺を取るなよ。オ、合點ぢや宵の間は。いつもの賭場で。明けの七ツの鐘を合
 圖に。私も加勢に出掛けるぞやと。尙ほも二人は密々と。牒し合せて丑松は。彼處をさして。三重 走り
 行く。名に高き日本三景の其一ツ。天の橋立の奇勝と云つば。右も左も碧海の。其真中は三十餘町。白
 砂の中に女男の松。緑りの色も長へ幾世替らぬ大長洲。渡し隔て、九世戸の文珠。今は切戸を名にしる
 き。菩薩の御堂も秋の夜の。さやけき月の影澄て。晝をあざむく眺めなり。折しも彼方の砂道を。かよ
 わきお袖がかた手綱。女方にやうくと。御門間近く挽き寄せて。作次郎さん。女の私が挽く車嘸辛氣
 な事でござんせう。何のく。近いと云ふても半道餘り。私を乗せて挽く車。定めて手も足も疲れたで
 あらう。其苦しみも皆我業。許したもと詫ければ。ア、モウく其様な事云はしやんすな。觀音様の
 お庇げで。かゝさんの心も改まり。わたしやモウ日本晴がしたやうで嬉しうござんす。晴れたと云へば
 此マアよいお月様。むら雲の邪魔もなく。今夜は此處を成相山の。觀音堂ぢやと假りに定め。御詠歌と
 なへてお通夜をしませう。シタが秋の夜寒むに。風ひかせてはと夫思ひ。妻乞ふ鹿の聲ならで。千草に
 すたく蟲の音もいと哀れを添へにける。ア、コレく。大分に夜も更けて來た。二人一緒に御詠歌を
 と彼方に向ひ合掌し 詠歌なう 浪の音松の響きも成相に風吹き渡る天の橋立。繰返し繰返す。詠歌に時をも移
 しける。早や丑滿のかねてより。御門の小影に身を寄せて。時刻はかりし丑松が。そつと立出で忍び足
 窺ひ寄つたる車の後ろ。作次郎夫れと心附き。ヤア。こなたは。オ、丑松ぢや汝の命を貰はうと。宵の

内から待つて居た。觀念せよと。懷中の。懷劍取出し斬り掛れば。お袖は恠り作次郎は。身をかはして丑松が。刀持つ手をグツと捉へ。すでんどうと傍へに投付け。理由をも云はず理不盡に。此狼藉はナ、何の爲め。コレお袖。必ず油斷せまいぞと。心を附くる其處へ。いきせき馳せ來るお源婆。娘は夫れと見。オ、かゝさん。お前もお通夜に來やしやんしたか。丑松めが作次郎さんを。ウフ、斬り損なうたか甲斐性なしめと。云ふ間に丑松起き上り。アイタ、婆さん。思つたよりは手強い覺め。其筈ぢや以前はレコを知らぬのか。己れが代つて療治をするど用意の刃物を取らせば。お袖は驚き其手に絶り。コレかゝさん。お前は背に改心を。嘘ぢや。嘘ぢやわやい。改心と見せたのは。壁を此處へ釣出して生命を取らう其爲めぢや。サア覺悟せよ。作次郎と。又振上ればまた絶り。エ、コレかゝさん。餘りぢや。餘りぢやわいなア。六十過ぎた身をもつて。後生を願ふ心もなく。娘の婿を殺さうとは。お前は何たる悪魔ぞや。何卒心をひるがへし。眞人間になつてたべ。夫の命が欲しいなら。私を代りに今此處で。斫りさいなんで下さんせと。身を摺付けて恨み泣。理りせめて哀れなり。エ、面倒など母親は娘を突退けコレ丑松。掛れくと氣を焦る。オ、合點と性懲なく。二人が一度に立かゝる。時に不思議や清光の。月は忽ち雲に隠れ。俄かに四邊は眞暗がり、車軸を流す雨諸共。天地を動かす大雷。ごるごるびつしやり落たる中に七轉八倒丑松は。虚空掴んで死してけり。跡の三人も打倒れ。人事は更になかりしが。空も次第に晴れ渡り。松の梢の雨霽。口に入りしかお袖はウンと。正氣つくくと。四邊を眺め

彼方に驚れし丑松が。無惨の最期に驚きながら。夫の傍に駆け寄つて。作次郎さん。我夫のうと呼ぶ聲の。耳に通じて。ウンと一聲。すつくりと。立上つたる夫の有様。見るよりお袖はまた悔り。ヤア、お前は足が立つたぞへど。云はれて始めて心付き。オ、足が立つた。有難や有難や。立つたくと嬉しさの。餘りに支股を踏鳴し。そんなら今のは正夢か。エ、お前は今の雷に。オ、雷鳴に正氣を失なひ悶絶したる其間に。まさく蒙る菩薩の御告。病ひの平癒もそなたの願望。納受あつたる佛の功力。シテお源殿には。オ、お前の足の立つた嬉しさ。ツイ忘れて居た。か、さんも矢張り彼處に氣絶して。エ、母を打捨て置くとは不孝。ソレ。氣を注げてと夫婦が立寄り。ゆり起し揺起せば。お源は漸う兩眼見開き。苦しき息をつきながら。今のは夢であつたるか。ア、冥加なや有難やと。理由も云はずに打喜ぶ二人は更に合點ゆかず。コレか、さん。冥加なや有難やとは。オ、合點かゆくまい。コレ娘。婿殿も聞いて下され。今この婆は夢ともなく。現ともなくありくと。成相の觀世音の。お姿を拜んだわいのうナ、何と仰しやる。サア靈夢の中に此身へ御教化。作りし罪も娘のお袖が。信心の徳に免じて。罪障消滅させてやらうと。有難い御告であつた。アレ、丑松が彼の最期も。觀音様の御罰であらう。夫れにつけても最前の。御札へせて今此處で。謝罪をせうと悔悟の念の帶の間より取出したる。紙の包みを開き見れば。コハ抑も如何にコハいかに。破れし御影はもとくに。なれ合ひたまふ御尊像。不思議なりける次第なり。上人小影を立出たまひ。ハア、善哉々々。計らず來り。始終の様子は彼れにて聞く。

懺悔に滅する汝が罪。尙ほも信心怠たるなど。仰せに三人は有難涙。かゝる奇瑞に誠の發心。本源は末も長からぬ。白髮の髻ふつと切り。亡き我夫と今目前。無慘に死したる丑松の。菩提の爲めに尼となり。西國三十三所の。靈地をいでや巡らんと。世はうし松の亡骸を。甕車にかき乗せて。弘誓の船にあらねども。海へざんぶり流れ灌頂。早や曉の鶏の聲。東天こうく孝貞の。道は一筋龍燈の。松に輝く朝日影。式部櫻も武士の。昔にかへる心地して。今は涙の礎もなく。鶏塚の羽たゞきや。赤き心の赤石も。過ぎて我家へ犬の堂。煩惱の夢今覺めて。五逆消滅自他平等。佛の功德末の世に。觀音薩埵の靈驗を。語り傳ふを尊とけれ。

成相觀音靈驗記

をばり